

# われ世界のかけ橋とならん ー復興から始まる新生日本ー



全国44経済同友会共催による第26回全国経済同友会セミナーが盛岡市で開催された。今回の総合テーマは「われ世界のかけ橋とならん～復興から始まる新生日本～」。新生日本のあり方について、地域経済の復活を中核に据えた中長期的な視点で議論が行われた。参加者は、全国各地の経済同友会会員ら約1,000人に上り、分科会では活発な意見交換が行われた。

## ■分科会テーマ

- 第一分科会：東日本大震災からの教訓～災害時における企業の役割と事業継続～
- 第二分科会：地域の活力で経済成長を勝ち取る
- 第三分科会：現場力を生かす これからの日本のモノづくりを考える
- 第四分科会：我が国のエネルギー政策を考える

## 個性あふれる 岩手県でのセミナーが開催

オープニングでは、平泉・毛越寺に伝わる伝統芸能「延年の舞」が披露され、静謐な雰囲気<sup>せいひつ</sup>が会場を包み込んだ。

開会挨拶には柏木斉副代表幹事・全国経済同友会セミナー企画委員会委員長が登壇し、「今回は復興から新たな日本の創造につなげたいという思いを込めてテーマを決めさせていただいた。地域の活性化をいかに実現していくかも大きなテーマである」と述べた。

続いて、高橋真裕岩手経済同友会代表幹事、達増拓也岩手県知事の歓迎挨拶、そして基調講演には、ジョン・V・ルース駐日米国大使が登壇した。折しも今セミナー直前にアメリカ・オクラホマ州で竜巻災害があったことから、全国経済同友会としての見舞金がルース大使に委ねられた。

また岩手・仙台・福島各経済同友会による被災地報告、IPPO IPPO NIPPONプロジェクトの活動報告が発表された。

## 新生日本に欠かせない テーマで議論が交わされる

第一分科会【東日本大震災からの教

訓～災害時における企業の役割と事業継続～】では、「有事の際はトップが明確な優先順位を付け現場へ委任すること、現場力の強さは平時からの企業文化が大切との共通認識を確認した。一方、今回の震災の教訓は国家レベルではまだ整理されておらず、今後どう活かしていくかが課題だ」と富山和彦副代表幹事・分科会議長より報告があった。

第二分科会【地域の活力で経済成長を勝ち取る】では、「論点を地域の産業創造、人材形成、国に対しての政策提言の三つに分けて議論した。地域が持つ地政学的、歴史的な経営資源の有効活用について議論ができる広域ネットワークが必要だとの意見もあった」と石田建昭中部経済同友会代表幹事・分科会議長より報告があった。

第三分科会【現場力を生かす これからの日本のモノづくりを考える】では、「現代日本のリーダーは現場を見ていないのではないかの指摘があった。現場と向き合い、自主独立の精神でいくこと、その原点に戻ることが大切ではないかと感じた」と鳥井信吾関西経済同友会代表幹事・分科会議長より報告があった。

第四分科会【我が国のエネルギー政

策を考える】では、「エネルギー政策は、安全性、経済性、安定供給、環境の総合的な検討が必要。安定供給のためにも原発は必要というのがパネラー共通の考え。また、CO<sub>2</sub>削減への貢献も重要課題である」と石原進福岡経済同友会代表幹事・分科会議長から報告があった。

総括挨拶には長谷川閑史代表幹事が登壇。その後、直木賞作家の高橋克彦氏による特別講演が行われた。エンディングには、地元保育園児たちによる合唱「空より高く」があり、参加者の胸を打った。



第1分科会



第4分科会

5月23日・24日開催

## 基調講演

起業力、女性活用、若者のグローバル化  
—日本の未来を支える三つの鍵—

ジョン・V・ルース氏 駐日米国大使



日本は今、活力を取り戻し、未来に目を向けている。私がまず提案したいのは「起業家精神を呼び覚ませ」ということだ。私は日本の各地で若者たちと話をする機会を得た。戦後この国を再建し、経済大国に成長させた時と同じよ

うな起業における可能性を、今でも日本の若者たちが秘めていると確信した。

二つ目の提案は「女性に投資し、より多くの機会を与える」ことだ。国際競争がさらに激しさを増していく今の時代では、どの国でも才能豊かな女性を経済活動に参加させないでおく余裕はない。

三つ目の提案は「日本の若者の物の見方を変え、国際的な視野で考えられるようにする」ことだ。よりグローバル化が進む経済で、日本を効果的に導くことができる若者を育成する必要がある。

そして、個人的にお願いしたいことがある。TOMODACHIイニシアチブの支援だ。このイニシアチブは、東日本大震災後に創設された官民パートナー

シップで、教育、スポーツ、文化、起業支援を通じて日米の若者の交流を促すことを目的としている。昨年500人の日本の若者が、米国でのプログラムに参加した。例えば、いわき市の高校生、白石春菜さんも交流プログラムに参加した一人である。彼女は帰国後、いわき市の観光を振興するために、同市のバスツアーを企画した。

日本の経済復興支援には、日本全国の多くの若者に対して成功に必要な環境を提供する必要がある。起業家精神を育成すること、ビジネスおよび社会でリーダーとなる機会を男性と同等に若い女性にも提供すること、国際的な視野を持った人が成功する機会を創出することだ。

日本の成功は米国にとっても非常に重要である。日米のパートナーシップは、地域の安全保障をはじめとする非常に多くのことの重要な基盤である。

## 総括挨拶

## 今こそ、リスクを取ってリーダーシップを示すとき

長谷川 閑史 代表幹事



われわれはあの3.11の大震災を含め、経験したことのない日々を遭遇している。先行モデルがほとんどない中で、自らもがき苦しみ悩みながら、解決策を作り出していかなければならない。そういう環境にあるということを4分

科会を通じて感じた。

「日本人の現場における力は落ちていない。ただ、リーダーたちが明確な指針、方向を示していないから現場が迷い、力を発揮できないでいる」という議論があった。私は、日本の平均的な質の高さは、今でも世界のトップレベルであると感じている。リーダーたちが、なぜこの事業をやっているのかといった本質的、根源的な目的や理由をおろそかにし、右往左往してはいないか。そこさえきちんと立て直せば、現場の力は十分に発揮されるのではないか。日本にはまだまだ力があり、可能性がある。

若者たちの育成も大きな課題である。若い起業家たちの、われわれの世代で

は想像もつかない活動、行動に喜々として取り組んでいる姿を見て、大いに励まされる。しかし一方で、起業のチャンスに遭遇しない、あるいは尻込みをしてしまう若者たちも多いのではないか。結果として失敗しても、それは次の成功のための糧であると考えさせることが重要だ。

われわれは、経験のない、モデルのない時代をリーダーとして引っ張っていかなければならない。自らを律して、判断し、決断し、行動し、結果責任を取り、それを若い人たちに示すと同時に自らの経験を伝えることによって、眠っている若い人たちの可能性に火をつけ、サポートをしていくことが極めて大切だろう。

この二日間で皆さまの学ばれたことが、これからの日々の行動に少しでもプラスに反映されれば、主催者としてこれに勝る喜びはない。